庭木の恵み 第20回

杉

文・☆写真　石田紀佳
（☆お香以外は、石田千里、松崎織子撮影）

樹齢三十年ほどの若い林

「飫肥杉は作品としてよい森林になったなと思えるには50年かかるので、それに比べれば早いほうです。」

これは、筆者が制作に携わっている展示物の納品が2年以上遅れていることに対して、提出先である服部植物研究所※の理事長であり、林業を本業とされている方のおっしゃった言葉。

その方の性格もあるのでしょうが、林業に従事されているからこその言葉でした。通常なら契約解消もありえるのに、その懐の深さ、展望の広さに感じ入りました。しかし同時に、それほどの作品にできるのか、という不安がおこり、その後に自分がもうすぐ50歳になることに気づき愕然としました。いったい自分はどんな森になりつつあるのだろうか、と。

これは個人的には大問題なのですが、今は杉の話に集中しましょう。50年、いやそれ以上の長い年月、自分が死んだ後までを想像しながら、杉を育成してきた人たちがいるのです。

杉山の採算

冒頭にあげた飫肥杉は、宮崎県日南市一体で育成されて、舟材として一世を風靡したブランド杉です。江戸時代に飫肥藩が杉の植林を奨励して以来、高度経済成長期ごろまでの300年にわたって、育て継がれてきました。第二次世界大戦後、造船用木材の需要が激減した後は、建材へと転換し沖縄地方に販売していたようですが、今ではそれも減ったとのこと。かつては、良材になる一本の杉を売れば大枚になったのが、今ではよほど条件のいい杉山でないと（道路に近くて運びやすいなど）採算があがらなくなりました。

50年かけて生まれる森林の良さは、どういう基準で計られるのでしょうか。服部植物研究所の理事長がいうのは、いわゆる採算とは違うように感じます。いつかお聞きしてみようと思っています。

材木と怪力

動力のない時代、馬や牛がいないと杉の大木は運べませんでした。でも、そもそも力持ちの人間がいないと、馬力にしろ牛力にしろ使えません。ちょっとは動かさないと動物に運ぶものをつなげられないからです。昔話に怪力の豪傑が出てくるのは、そのような人が必要とされ活躍していたからでしょう。頭のいい人が梃子（てこ）の原理を持ち出したとしても、力持ちの人がいないとどうにもこうにも大きなものは運べない……そんなことを実感する出来事に最近遭遇しました。

（上）チェーンソーでの林業経験のある青年が、手ノコで三本の杉を伐った。
（下）手のこで玉切りにのぞむ女性。半日で三本の杉を六本にした。

（上）切り倒した杉の長さをはかる筆者と大工さん。
（左）丸太を運ぶ男三名。中央奥が力持ちで不耕起農業家の五十嵐武志さん。

神奈川県の里山で、納屋の床材用に裏山の杉を三本伐らせてもらいました。まずはノコギリで伐ります。これはたまたま大家さんが捨て置いていた大きなノコギリを使うことで、のべ二日ほどで玉切りまでできました。動力がない時代の大工道具は優れものだと聞いてはいましたが、まだ家庭にチェーンソーが普及していない昭和半ばのノコギリは錆びていても優秀でした。根際の径が40センチほどの杉三本を長さ3メートルずつに切って、6本にしました。

太くはない丸太とはいえ、人力で道路まで下ろすには重すぎるので、県の製材所に相談すると、クレーン付きトラックで林から丸太を運びだすだけで6万円ほどかかるといわれました。製材代もあわせると、あまりにも高い。これが林業の現状だなあ、と裏山の杉をあきらめかけました。こんなことなら伐らなかったらよかった……

が、そんなときに怪力の人が現れたのです。写真のように男性三人で下ろしました。大工さんのふたりはへとへとになったのですが、力持ちの農夫さんは涼しい顔。

動力に慣れきった私たちは、大きくて重いものだと、人力では無理だと当然のように見なします。鞭打たれて重労働をする時代は終わらなくてはいけないけれど、道具としての人体の可能性は終わらせたくない……杉は忘れそうなことを思い出させてくれる植物です。

杉香のつくりかた

杉の葉を燃やすととてもいい香がします。杉が線香にもなっていると聞き、試しにコーン型をつくってみたら意外に簡単にできました。
杉の葉を乾かすのに時間がかかりますが、乾燥した葉を粉砕し、水で練って成型するだけです。粉砕はミルサーでもすり鉢でもできます。

①乾きやすくするために、杉の葉の芯から細かい葉だけをはずす。
②手でほぐすと粉になるくらいに乾かす。
③水で練ってコーン型にして、乾燥。水の量は成型しやすいように少しずつ加えて様子をみる。

服部植物研究所※
蘚苔類地衣類専門の植物研究所。2010年の一般公開にあたってキュレーターとしての仕事を石田が担当。文中の展示物は、コケという植物が地球の歴史の中でどのような位置にあるのかを感じるためのもの。
杉の観察記録は、月刊杉web版の「小さな杉暦」をご覧ください。
http://www.m-sugi.com/backnumber_name.htm#ishida
◆石田紀佳　フリーランスキュレーター。一九六五年京都生まれ。手仕事と自然と人をキーワードに、美術手工芸品の展覧会企画や執筆を雑誌等に寄稿。雑誌ソトコトに4年連載した記事が「草木と手仕事」として5月上旬に単行本化。